



アートとサイエンスの 接点をもとめて

話題提供者

藤島 博文

日本画家(日展審査委員)

科学との出会い

私は四国の阿讃山脈の山深き一軒家で生まれましたが、そのころとても不思議に思っていたことがありました。何故空のお月様が落ちてこないのか、何故同じ土の中から赤い花や白い花が咲くのか、何故地獄極楽絵のような世界があるのだろうか。やさしく大好きな父や母といつかは死別する日がきっと来る、その時の悲しさを思いつめてはとても悩んでおりました。そのためか俗に言う正夢をよく見るようになりまして。それがあまりにも的中しますので余計自分が怖くなり、この世の中、不安だらけでございました。それだったら死んでしまえば楽になるだろうかと真剣に考え抜いた日々を思い出します。

高校では標本室に骸骨が寂しげな格好でぶら下がっており、人間の原形の不思議さやこの人の命はなぜどこに行ったのか、と考へつつ強烈な不思議を感じたわけです。後年、その骸骨の印象を描いて「標本室」という画題で春季日展に出品したところ、初受賞させていただきました。このように小さいころより高校卒業までの日々の原体験がいつも私の心の中に棲みついており、まず最初になぜかを思い、それから仕事を始めるようにしています。一作一作になぜかを深く秘し沈めて描きたいと心がけております。

19才で上京して絵描きになりましてからも、大阪万博や、当地で開催されましたつくば万博、またプラネタリウム、野辺山天文台と科学の世界との接点は数多くありました。大きく心に残りましたのは次の二つです。

一つは熱海の画室にある日、湯川博士の奥様とご長男がお見えになって私の作品をご覧になり大変感動したと申されて、長時間お話をさせて頂いたことです。文化や芸術、世界の平和のことを情熱いっぱい語られ、生前、博士もそのようなお考えであられたと申されておりました。あの偉大な人間でも私たちの仕事をこんなに大切に思っていて下さるのかと驚き、うれしく思いました。

もう一つは今から四年前にハワイ島のすばる望遠鏡に

うかがったことです。私は「風水四神図」の依頼を受け、星宿とか古代人の宇宙観を調べたり、いつか「地球を観る人」を描きたいとも思い宇宙の資料を集めておりました。そんな中とうとうすばる望遠鏡に辿りついたのです。宇宙はニュートリノの発見によりさらに新しい世界へ入ってきました。私たちの作品においてもこれからは宇宙空間を十分に意識した作品を描きたいと考えております。

また最近、村上先生の遺伝子生命科学理論のご著書を数冊拝読させていただき、大変感銘を受けると同時に、胸の中を何か新しい風が吹き抜けたような爽快な心地が致しました。サムシング・グレート発見への到達は、科学者故にさらに更に輝きを増して後世への大きなプレゼントとなることであらうでしょう。

芸術と宗教

これまで人々の心を清め、高め、深め、豊けく誘ないつつ人間の尊厳を在らしめたのは実に宗教の力でした。日本画家の多くのルーツは画僧です。画僧たちの仕事は、ご本尊の書写や、曼荼羅を描いたり、神仏を荘厳申し上げる祈りの謙虚な寺社の建築でした。浄土、地獄、極楽の演出も全て僧とともに芸術の力によって一宗一派を輝かせてきました。絵描きは黒子でありまして、仏画には自分の作品であっても恐れ謹みて雅号とか名前は書き入れないのが慣わしでした。しかし、名前はなくとも人々の心を打つ芸術の力は不変です。一宗が減んだとしても、大きくは一国の文化文明が消え去ったとしても真に表現された一枚の絵、一体の彫刻には天命が宿り、半永久的に残るものです。後世の人々はそれらからその時代のメッセージを読み取り、大切な遺産として尊ぶのです。芸術の力は人間が一貫してもちうる潜在的なパワー、エネルギーでありまして、私には宗教にも道徳にもない人間生命の大道をまっすぐ貫く科学的何かがあるように思えます。

美の力と科学の力

古代の人々は芸術を無意識のうちに高めたように、科学する力も人間生命の中にいつもあったのではないかと思います。芸術家のもつ直感知のような、いわゆる見える美・見えない美を見つめることができ、しかもこの宇宙は非情・有情にわたる全ての生命の宝庫であると通達していたのではないかと考えます。無駄なもの一つもない、それぞれ命をもった大切なもの、そういうふうに物事をとらえながら我々は絵を描いていくわけです。

人類が今まで残した文化・文明等はまことに尊いものですが、現代に至って何か大きな較差ができてしまいました。何とか人類が幸福になる世界共通の規範が出現できないものかと考えております。その一つは真正の宗教に出会うことです。二つは純聖の哲学に出会うこと、三つ目は利他行の科学に出会うこと。科学は人間を益することですので、科学者が庶民の中に飛び込んでいるんな活動をやる、これが大事です。最後はそれらを一貫して貫く感動の美学を保つことであろうと思います。真・善・美、この三つの言葉が別々ではなく、真と善を最後に美が包み込んでいくとしたいのです。

私は人生の上でも作画に当たりましては無意識のうちに科学を考えるようになってまいりました。宇宙についても次のように考えています。三つの宇宙があり、その一つは見え渡る虚空大宇宙、二つ目は目を閉じて瞼の裏にきらめく無数の星々、いわゆる自我の小宇宙です。これに加えて第三の宇宙、造形宇宙があるのではないかと考えるようになりました。大宇宙の中に生かされている自我の小宇宙が心で捉えたものを、一枚の紙の四隅の中に絵筆で作りに上げることです。大・小宇宙には美の女神様が必ず棲んでおられ、絵描きは美の女神様の郵便屋さんとなって造形宇宙のお宅へ便りをお届けする役目なのかとも思います。その便りが幸せ一杯であれば人々は歓喜して喜び、ゆくゆくは国宝となるかもしれません。

村上先生の遺伝子のお説をあててみますと、このような素晴らしい作品からは、あの洞窟壁画以来、潜在のうちに蓄積されて眠っていた多くの美意識達が即座にスイッチオンされて働き出すということです。よい作品からは高度なるエネルギーが正気になって醸し出されてきます。その気を受けて人間本来のもっている精気が蘇る。そして見る人の心を清浄化し、品格ある人間へと知らず知らずのうちに導いていくのです。

先人たちが到達した尊い境地を秘めて描かれる日本画の名品に触れることによって感性豊かな人生作りにも少しもお役に立ち、画面の奥に潜む絵画の力を見て取る尺度をもっていただければうれしく思います。

真の名画は、「写生」と「写意」、この二つが高まった時、「気韻生動」といって生き生きと精気に満ちた品格が生まれるものです。日本画の第一の条件は画品、次に画格です。我流で無法の、自分の狭い心の引き出しから個性だけを取り出した作品では、人々の魂を揺さぶることはできません。科学の世界においても同じだと思います。どのように科学が発達・進歩しても、人間の命そのものを輝かすことができなければ、無駄に尽きるわけです。

江崎先生が、新聞で「創造力の育成」ということを述べておられました。芸術も科学もこの世界においては全く同じです。芸術は何もない一枚の白紙が、日ごろ留め置いた術を使って価値あるものに変えてしまいます。科学も日ごろの問題意識から生まれくるものだと思います。創造力を育てるためにも美しいアートと価値あるサイエンスとの接点と出会いが大切ではないでしょうか。科学の直感即座の力、芸術のたゆとう緩やかな力、この二つのパワーが会合する時、今までにない創造の世界が拓けて行きます。その舞台はここつくばであると想います。若き学園都市、科学研究都市、それを潤し、癒し、勇気づける真の美しき芸術都市の三本柱を樹立して、人材宝庫の都、風土文教の都、美科学の都、そういう都が出現すれば、世界の人々にとって大切な拠所宝所となるでしょう。

つくばにまいりましてまだ一年がきませんが、つくばは本当にすばらしいところで、霞ヶ浦あたりも逍遥いたしました。そこから生まれました和歌を朗詠して終わらせていただきます。

筑波嶺を紫金に染めておお夕日

関東平野 慈光満ちませ

予科練の霞ヶ浦のさざなみの

波の間ひくく 白鷺舞うも

(2003年10月10日)

SAT